

持続可能な社会の担い手への思い

全学共通教育センター長

荒木 秀夫 (あらきひでお)

大学と呼ばれる制度は、およそ800年前から始まりました。当時と現代とは、全く異なった制度であることは当然ですが、それでも脈々と受け継がれているものがあります。それが教養教育です。教養それ自体も、社会のあり方によって大きく変化してきましたが、政治、経済、軍事に関わる大きな事件が起きる度に、世界的な大学の変革がもたらされました。それだけ、大学は、社会に対して深く結びついているといえるでしょう。徳島大学でも例外ではありません。

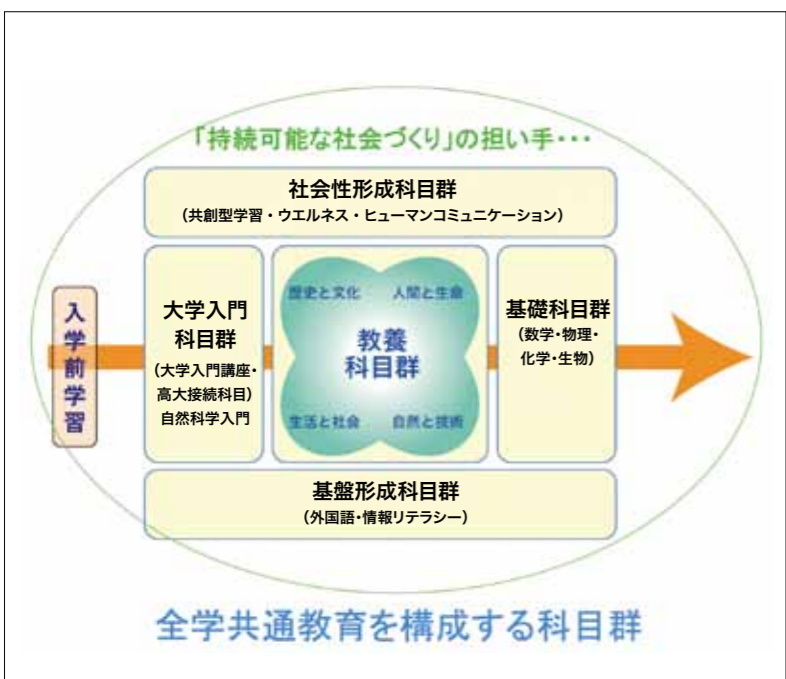
徳島大学では、教養教育を中心とした教育を全学共通教育と呼んでいます。その内容は、教養教育と学部を越えた共通性の高い教育が含まれていて、社会との接点を



福田スティーブ利久准教授による発信型英語の講義

全学共通教育科目群の編成

全学共通教育は5つの科目群によって構成されています。大学入学後、大学教育に適応し、知的訓練に取り組む態度を学ぶのが「大学入門講座」です。そして、社会人として求められる豊かな人間性と高い倫理観を修得する「教養科目群」、体験を通じた人間性、社会性を身につける「社会性形成科目群」と続きます。学習の基盤・基礎となる学習は、諸科学の基本的な思考法や言語運用能力を身につける「基礎形成科目群」と、複合的な視点から専門分野を理解するために必要な基礎を学ぶ「基礎科目群」から成っています。



全学共通教育センター副センター長 三好 徳和 (みよしのりかず)

大学院ソシオアートアンドサイエンス研究部

基礎科学研究部門 自然科学分野 准教授 齊藤 隆仁 (さいとうたかひと)

大学院ソシオアートアンドサイエンス研究部

基礎科学研究部門 人文科学分野 准教授 荒武 達朗 (あらたけたつろう)

見据えながら進めようとしています。一言でいうと、持続可能な社会の担い手として求められる知性、感性の教育です。決して、十分に機能しているとはいえないかもしれませんが、理想を掲げて努力することは、どんな社会にあっても大学がとるべき立場であるといえます。全学共通教育では、このような視点から、教養教育、基礎基盤教育を単に実用的であるかどうかではなく、社会の中でそれぞれの分野で貢献できる人材育成の一助になればという思いで進めているところ です。

こうした理念に基づいて、徳島大学の全学共通教育は、5つの目標に従って、授業科目を編成しています。それは、大学入門科目群、教養科目群、社会性形成科目群、基盤形成科目群、基礎科目群といった構成です。内容としては、大学における「学び」と「学ぶ姿勢」を考えてもらうこと、現代社会・自然の様々な問題、課題などを学問的立場から捉えること、社会人としての協働、協力の技能・態度を学ぶこと、専門領域を越えた学術的な技能を理解し活用できる能力を高め、それぞれの専門領

域を支える基礎となる学力を得ること、...といったこととなります。5つの科目群は、密接に関連していますが、学生の側にとって大切なことは、それぞれの科目群と、その中に含まれる授業科目で学んだことが、どのように結びつけられるかを考えることです。一人の人間、一つの自然、一つの社会は孤立していません。それを結びつけて理解するための、「ものの見方、考え方」をそれぞれの個性に従って、自らの生き方に活かしていきけることを私たちは願っています。社会も、自然環境も止まり続けることなく、常に変化しています。単に、学んだ知識や技能によって直面する問題を解決することは不可能でしょう。その解決の仕方は、学び方の学びの成果、つまり知識や技能をどう活かしていくかが生涯にわたって問われていきます。

全学共通教育の仕組みは、目標に従って科目群を編成しています。学ぶにあたって、全学共通教育にとどまらず、専門教育も含めて一つの理念、一つの価値観へと学生のみならず「わがもの」とすることを切に望む次第です。

大学入門科目群

全学共通教育では、大学入門科目群を設置し、その中で大学入門講座を全学部必修科目として設置しています。大学入門講座は、大学生として今後学ぶにあたり大きな二つの目的があります。一つは、能動的学修の習慣を身につけ、批判的メタ思考を身につけた教養人になるきっかけを作ることです。もう一つは、各学部において、専門分野を学ぶための方向性を示すことです。入学式のあと、慌ただしく授業を受けたかも知れませんが、この様に、大学における学修に非常に重要な内容です。教養ある専門家になるため、もう一度授業内容を思い出していただければと思います。

また、この大学入門科目群には、高大接続科目(数学)と自然科学入門科目(物理学・化学・生物学)があります。大学は、自ら学ぶところです。たとえ高等学校で履修していない科目でも、大学として必要であれば履修しなければならぬ専門の授業があります。また、苦手で充分高等学校では理解できなかった科目もあるかも知れません。そのための授業です。また、全学共通教育センター

教養科目群

は、自学自習できるリメディアル用 e-learning 教材を用意しております。全学共通教育センターのホームページから利用できますので、是非活用して下さい。(三好徳和)

大学の起源のひとつとして、中世ヨーロッパにおいて商業経済が発達するにともない、商取引における利益衝突の解決、複雑な行政機構の構築が望まれ、そのために高度な専門的知識を身につけた知識人の育成の場が必要となったということがあります。12世紀以降、勉学を修めたい若者がヨーロッパ各地で集い、共に勉強していくことで、徐々に固定的な大学ができていき、専門だけでなく、リベラル・アーツとよばれる文法・修辭学・論理学の3学と数学・幾何学・天文学・音楽の4科が大学で誰もが身につけるべき教養科目となりました。グローバル化した今日の世界では、大学において専門だけでなく教養を深く学ぶことの意義はますます増大しているのではないのでしょうか。



徳島大学では持続可能な社会のための教育(ESD)を教養教育と位置づけて、社会人として必要な豊かな人間性と高い倫理観を修得するために、「歴史と文化」、「人間と生命」、「生活と社会」、「自然と技術」という4つのテーマに基づいた様々な授業題目が提供されています。すべて選択科目として開かれていますので、興味・関心に応じて選択できます。学部で専門の授業をおしてキャリア形成に必要な知識や技能を習得するこ

とがひとつの柱だとすると、教養を学ぶことで人格形成・人間形成をめざすことはもうひとつの柱といえるでしょう。大学を出た後も自ら生涯学び続けるきっかけとして教養の授業を履修してください。(齊藤隆仁)

社会性形成科目群

学習内容が記憶に残るのは、聞

シオンと人間関係を体験的に学ぶ「ヒューマンコミュニケーション」という3つの授業科目を提供しています。

また、教師から一方的に教えてもらうだけでなく、グループワーク等を通してお互いに学びあうということも大切でしょう。共創型学習と教養科目のいくつかの授業には、社会人ボランティアも参加して学びのコミュニティを作り、相互に学びあいをおこなうスタイルの授業もありますので、積極的に受講して学びを深めていってください。(齊藤隆仁)

基盤形成科目群

本学では学生の自立した学習を重視し、その支援を進めています。これが高校までの「教えられる」学びのあり方と異なる点と言えます。その自立的学習に向けた基礎的能力の養成が、基盤形成科目群の目指すところです。

この科目群は外国語と情報科学に分けられます。まず英語についてです。本学の教育は中学・高校での勉強を進展させ、それを「使える」「レベルにまで高めることを目的とします。英語の運用能力を

いたときは10%、見たときは15%、話し合った時は40%、体験した時は80%、教えたときは90%であるといわれています。またスポーツやコミュニケーションなど実際に体験を通してしか学べないこともあります。社会性形成科目群では、体験を通して人間力や社会性を身につけるため、スポーツ・生活科学・文化をテーマとした「ウェルネス総合演習」、課題設定と解決をグループワークで行う「共創型学習」、コミュニケーション

と、物理学・化学・生物学及び実験実習)を設定しています。これらの科目が必修であることから分かるように、専門分野の内容を理解するための土台となる学問で、非常に重要な科目です。例えるならば、各学部学科で学ぶ「専門」という「家」を建てる「基礎」と言えます。皆さん考えてみて下さい。新築の家を訪問したとき、この家のうことは先ずかないと思います。この様に、基礎は外からは見えないものです。ただ、基礎工事が不十分な家は、数年すると傾いてしまいます。

さらに最先端科学である「専門」の進歩の速度は非常に早いです。その際には、最先端の研究を理解するため、さらには行うために、ある種の専門としての家のリフォーム(専門分野の変更)が必要になるかも知れません。その際、基礎工事がしっかりしていれば、理解やリフォームも容易になります。

基礎科目群

全学共通教育として、各学部の必要に応じ、基礎科目群(数学

初めての外国語を学ぶきっかけ

「新しい世界への旅立ち」

大学院ソシオアーツアンドサイエンス研究部
基礎科学研究部門 人文科学分野 教授
桂 修治 (かつらしゅうじ)

それぞれの言語には、独自の歴史や文化の蓄積があります。言語の学習を通じてそれらに出会うことは大きな意味があるといえるでしょう。でもそんなことを言われてもピンとこないと思う人も多いかもしれません。

初めて学ぶ外国語の醍醐味の一つは、何よりも、「新しい自分に出会う」チャンスだということではないでしょうか。外国語を学んでみると、私たちの文化もまた、言葉を媒介としたネットワークになっていくことに気づきます。それは私たちを守ってくれと同時に縛りつけているものでもありません。何もかもわかることはしんどいことなのかもしれません。未知の言語の世界に足を踏み入れるということは、母語だけですべての用が足せる楽で快適な世界を一時的にでも離れて、異なる言語の新しいネットワークの中に入ってゆくと、一つの刺激的な冒険です。それは同時に、自分を解放し



ドイツの高校生を迎えて。
(English Support Roomにて)

全学共通教育センター学習支援室

大学院ソシオアーツアンドサイエンス研究部
基礎科学研究部門 人文科学分野 教授
宮崎 隆義 (みやざき たかよし)

全学共通教育における
学びのサポートとして

自学自習スペースとして

全学共通教育センターでは、様々な学びのサポートの場を提供しています。そのひとつが学習支援室ですが、総合科学部3号館1階スタジオにあり、様々な分野の教員が待機して、皆さんの学習についての相談に応じています。ぜひ先生方に気軽に相談してみましよう。例えば、「授業でわからないことがある」「履修・進路について相談したい」「とにかく先生と話してみたい!」など、どんな質問でも結構です!いろんな先生とお話することで、新たな学習スタイルに触れる良い機会となります。学習支援室の場所やパンフレット、先生方が待機している時間帯については、全学共通教育センターのホームページにある学習支援室を参照してください。

また、共通教育5号館2階に、机と椅子を配置したスペースを確保しています。自動販売機、コピー機、ウォータークーラーなどもあって、快適な自学自習環境となっています。

(利用時間:月~金 8時30分~21時30分)



学習支援室



薬学部薬学科 5年
小早川 夏樹
(こばやかわ なつき)

私が全学共通教育を受けたのは、3年前のことです。全学共通教育を受ける上で一番初めにしたことは自分で時間割を作ることでした。全学共通教育の時間割は、ほぼ時間割が決められている専門科目とは異なり、個人によって様々です。シラバスを読み、卒業するまでに必要な単位数を満たすよう、自分で時間割を組み立てなければなりません。このシステムは、自分で決めたことに責任を持ち、能動的

に物事に取り組む姿勢を身につける良い機会になりました。

また、全学共通教育では専門科目とは異なる分野の授業がほとんどで、宇宙について、徳島の文化、心理学、ドイツ語など、今後学ぶ機会がないかもしれない様々な分野の授業を選択しました。これらの分野を広く学ぶことによつて、教養を身につけることができました。さらに、ディスカッションやプレゼンテーションを行う授業もあり、コミュニケーション能力を育むと共に自分の考えを相手に分かりやすく伝える技術も学ぶことができたことは、専門科目でも役立つと思っています。

上級生になって振り返る 全学共通教育



工学部機械工学科 4年
小倉 康平
(おぐら こうへい)

徳島大学には全学共通教育というカリキュラムがあり、これは専門教育の基礎や社会人としての教養を学ぶと同時に、自ら学び、探求を深めていくための方法論を習得するものです。上級生になり多くの専門科目を履修した今、全学共通教育について改めて振り返りたいと思います。

専門分野を学ぶ上で特に関係があるのは基礎科目群だと思います。ここでの数学や物理の知識は専門分野で度々使われるため、これら

をよく理解していないと専門分野の理解に影響が出るようになります。

実際、僕も基礎の理解が十分ではなく苦労することがありました。他にも、外国語の習得は様々な場面で重要であり、情報科学で得た知識は課題提出の助けとなりました。専門分野と関連のなさそうな教養科目群に関しても、様々な知識を習得することで幅広い見方ができるようになり、倫理性も磨かれたと思います。さらに、全学共通教育を最初に行なうことで大学教育に慣れることができ、専門分野学習への抵抗が少なくなつたと思います。

改めて振り返ってみると、僕は全学共通教育でたくさん経験と必要な知識の習得ができたと思います。だからこそ、全学共通教育を行うことは重要であると思いま



応用につながる 基礎をしっかりと

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
生体情報薬科学分野 薬物情報解析学講座
薬物動態制御学分野(薬学系) 准教授
石田 竜弘 (いしだ たつひろ)



Cancer Nanotechnology
Gordon Research Conference
July 14-19, 2013
Mount Snow Resort, West Dover, VT
Chair: James R. Baker
Vice Chair: Leaf Huang

を担当することになりました。「みんな薬学も医学も初めてのことばかりですから、私も自分の1年生の時を思い出しながら初心に戻って、少しでもわかりやすく、身近な事例なども含めて話すようにしています。導入講義なので広く浅くですが、重要なポイントに興味を持ってもらって、後期以降の関連講義でステップアップしていつてもらわなければなりません。」

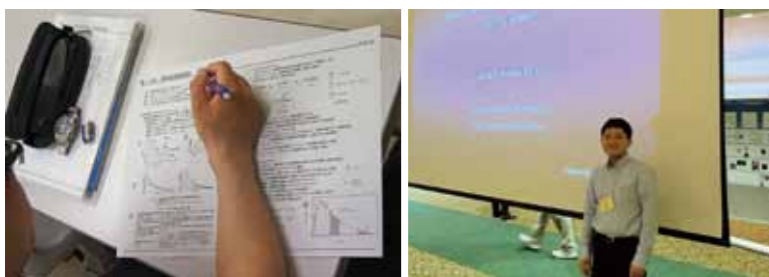
「今は基礎の基礎ですが、これが3年4年と専門的に多岐にわたって学んでいく中で、どこがどのようになってきたのか、後で思い出しにくくなるように願っています」話の途中で何度も「ここは3年生になって〇〇につながっていくから覚えておくように」というように、興味を持続と学ぶことの意味を確認するように、細かなチェックを入れながら授業が進んでいきます。

取材を終えて、その日のうちに東京へ、そして招待講演のためにボストンへと飛び立った石田先生。

テーマは「ナノテクとガン治療」。「創業」ではなく「操業」として、

薬学のみならず医学・生命工学なども含めた「医薬融合」を目指して研究を進めています。

そんな先生の授業は「基礎医療薬学1」。今年から初めて1年生



授業の終わりには出席票を兼ねた「リアクションペーパー」を提出してもらいます。その日の感想や理解できなかつた部分、疑問点、質問などが書き込めるようになっていきます。希望があればメールアドレスを記入して、先生から直接回答が得られるようになっています。同じような内容の質問があれば次の授業で再度説明します。

「最初はみんなちゃんと書いてくれますが、だんだん少なくなつてきます(笑)」

いかにして学生の興味を持続さ